

平成二十七年十二月一日発行
通巻一〇九六号(年月) 一日発行

京鹿子

12月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その三

ひとことにふた言み言そぞろ寒

いちじく挽ぐ襠褌まだまだ半乾き

鈴生りの無花果こぼす日の翳り

鳥の尾の草の彩り寒露の日

抽斗の団栗空へ親離れ

猫じゃらし内弁慶は風の外





白桃やうわべの傷に見えぬ恋
物言はぬ菊師の笑みに百の息
霜降に身をねぢりては生き直す
冬星のわが眼に落ちる光かな
どの坂も黙を引きずる系露の日
日光東照宮にて
鳩吹いて風を諫める眠り猫
秋気澄む葵の紋の社殿群
走り根の古ぶふた二荒らの暮早し





— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

櫨紅葉

枯 葉 降 る 微 かに 動 く 猫 の 耳
冬 め き て 山 河 へ 緋 いろ 探 し ゆ く
悼 み かな 風 に 火 花 す 櫨 紅 葉 (系 露 忌)

— 追 懐 — (その 十 六)

人 賞 め て 償 と す る 冬 木 山 (平 成 八 年 作)
雪 虫 を 食 つ て 鴉 の 罪 つ くり (平 成 八 年 作)



— 近 詠 —

和田 照海

晩夏しぐれ

潮の目より動き初めたる流燈会
刺網の晒し干しなる盆の島
船宿の床下新秋の潮満ちぬ
秋蝶の風あそびして島往き来
沖よりの晩夏しぐれの光りつつ

秀華採集

天空に魔女のかんざし百日紅

和歌山 宇田篤子

世の中に魔女の存在を信じる人は、多いであろう。天に向かって突き出している百日紅の一枝を「かんざし」と見立てた感性は、魔女と融合させることによって作者独自の世界に読み手を誘い込んでいく。さて、次は魔女にどんな贈り物をするのであろうか。

水底の小石の動く雁来月

京都 門馬貴美子

「添水闇小石が石に育つとき」（海道）の句を思い浮かべる。季節の移ろいが始まると些細な水の流れが生まれ小石に命が宿ることになる。その命の連鎖が水底全体へと伝わっていく。それは、正に本能により動く雁の飛来に通ずるものがある。

さざなみの流木洗ふ橋晩夏

京田辺 佐々木興作

どこからか流れ着いてきた流木が、今は穏やかな川の流れに身をまかせている。まるで、過酷な自然から受けた傷を癒しているようだ、と見た作者の胸に晩夏の風が過る。そして、荒々しい夏を体験した橋には晩夏の帳が、幕を下ろすように降り始めるのだ。



神麓集

初 鴟 藤 岡 紫 水

愚痴を聞く間合ひにたゝむ秋扇
月入れて鱗目荒き鯛雲
初鴟や一天支ふ楠大樹
幾山河妻恋ふ鹿の越ゆ月夜
秋の風父情さらりと流しけり
米寿祝ぐ

松 本 鷹 根

秋深む松の幽姿に棲む湖辺
鯖雲に日を游がせて釣りの黙
稔り田の畦を巡りて奥明日香
故郷は案山子の記憶米寿祝ぐ
余生てふ野に戯れて草風

松 田 都 青

この尖の深さ広さを知らず秋の筒
秋愁を腹に残せし八の闇
その削を見たしと言へず去る晩秋
どの店も値も丈みな同じ秋刀魚店
八十八才の秋愁長し鐘を聞く

洪 団 扇 北 川 孝 子

秋澄めり沈黙といふ思ひやり
涼あらた三歩下つて仰ぐ峰
川風の機嫌よろしき洪団扇
氷白玉懐古の情の深まれり
穴惑ひ齡いつしかこなれゆく
神の位

丸 井 巴 水

塔影に頼るものあり凌霄花
白き鳥しろく残暑の橋の反り
葉隠れて青ほほづきの差恥心
一束の稲穂が神の位を得たり
ビル陰に人立ち饅えてゆく残暑
鬼 蓮 塩 貝 朱 千
満月や狸囃子のほしい刻
空ばかり見て鬼蓮の枯れはじむ
大鬼蓮退治するかに大鍬
音もなく小指に触るる破れ蝶
十六夜の霧に悲しみ置いてくる



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

天空に魔女のかんざし百日紅

和歌山 宇田 篤子

些細なるものにつまづき暑氣中り

昼顔に魅かれて下る土手百歩
仰向きに落ちてひと声蝉むくろ

もえつきし送り火の闇背後より

アリゾナ 伊吹 之博

処暑夕べ猫の企む勝手口

水底の小石の動く雁来月

京 都 門馬貴美子

神前の無辺のひかり萩白し

滾滾と京の湧き水新豆腐
落し水収穫間近友の笑み
星月夜子はそれぞれに輝きて

ばつたんこ森の深みへ音漫ろ

梅雨のごと降つたり止んだり緑映ゆ
オハイオ 水谷 直子

ときざむ廻り人形つばめ去ぬ

さざなみの流木洗ふ橋晩夏

京 田 辺 佐々木興作

大西瓜在の友より重く受く

若葉ゆれバツクの青空すみわたり
窓の外四方八方若みどり
茄子漬の故国の味や娘に感謝

大西日背に銀輪のつらなれり

札幌 野村 軈枝

夏座敷部屋かけぬけし幼き日

山巔に金星栗飯のにはひ

わだかまり徐々に消えゆき夜の秋

小鳥来る椅子に老眼鏡ふたつ

里訪へば亡母の白萩咲きこぼる

五右衛門もカツと眼を剥く油照り

サツカーボール抱へ日焼けの女の子

酒田 藤波 松山

炎帝の古都をしづしづ行脚僧

とんび二羽寺院の森の夏空に

夏秋や疎水豊かに代を継ぎぬ

無人家の仏拝みて著莪の花

遷宮の楼門紅し夏木立

松戸 岡山 敦子

新涼やあらため気づく明日の事

芋の露こぼれし父の掌

今頃は一路南進燕の巢

さいたま 神田 惣介

子へ継ぎし結婚指輪終戦日

浴衣着て大人の姿孫娘

台風の目の中の鳥浮き上がる

草抜けば憂き事はなし庭の風

習志野 上野 紫泉

砂糖なき牡丹餅語る終戦日

美味しさに言葉もなくて走り蕎麦

京五条晩夏の橋に彩の風

千葉 伊藤 希眸

夕顔の灯ともすころや主婦の貌

影動くたびの重力簾古る

参道の長考の牡鹿すつと立つ

船橋 元橋 孝之

飯を炊く蝉は七日の露を吸ひ

一路行く背の気高し蝉時雨

蓮の葉に乗る日もあらむさりながら

後悔の身に増えしさま鬼やんま

深海の水母重い重い口ひらく

直江 裕子

大暑かないのちうすめて筆不精

噤んでも噤まなくても終戦日

端居して駒音ぴしと王手飛車

炎天にじゆわつと誰もあなくなる

汗引くを待ちてインターホン鳴らす

金子 正道

文楽の首が目を剥く酷暑かな

まづ兄の掬つて見せる金魚かな

秋雨やつながれてゐる寺の犬

高野 春子

銀座には銀座の匂ひ秋日傘

反骨は若き日のままカンナ燃ゆ

ハンカチの今日一日を洗ひけり

百日紅寺門にかかり足ならし
炎昼に信号を待つ草強し

東野中圭子

歩けない日の体操や秋の蟬

新涼や痛みを負けずハガキ書く

朝顔の競ひ伸びゆく軒の下

手拍子にあの日々たぐる盆踊

空青くハイビスカスの誇らしげ

蝉時雨融通無碍に師の名句

秋の海江の島ぐいと動きある

雁の列遠近法もて西へ

いぼむしり足裏とらるゝ砂利の音

葛の風路地のどこかに波郷の眼

夕萩や背高きひとのゐるやうな

敗戦日おばあは今朝も蛸を突く

美しき蛾のうつくしく伏せて死に

飛魚の遙けき旅はジユラ紀より

敬老日辿る冥土の道しるべ

なつかしや悩む不眠の熱帯夜

垣間見ゆ巨大なタワー罽雲

暮がての寸暇惜しんで虫すだく

いつぺんに時計の戻る甜瓜

大花火映して流る信濃川

神田美千留

深き霧車の尾灯ふつと消え

新蕎麦を里の土産と戴けり

夏風邪はどこかへ消えし師の訃報

青葉窓湯船に女解かれをり

37℃ただただ呼吸する猛暑なり

都峰師の訣れは無音汗滂沱

自適とは時に虚しく芋を煮る

去ぬ燕何追ふとなき遠眼癖

降る星と湧く螢火の中に在り

ただならぬ世にこそ惜しむけふの月

みちくさの頬を打たれり葛の花

無花果の傷まぬやうに文を書く

桃畑ダムの水位の充ちてゐる

蘊蓄の多き男や種なすび

湖昏れて魚の跳ねる音も秋

昏れのこる古刹の屋根の秋あかね

桐一葉地に置くまでの高さかな

ひぐらしの鳴きやまぬまゝ夕日落つ

手土産の紐のあや取り萩の庭

朝刊を受く全身に秋たちぬ

彼岸花と謂はれ現のはなやげる

蝸や郵便受けに旅便り

児玉有希

福島照子

中島悠美子

河島坦

高尾寛美